



少年期と同志社入学

——先生の何冊目かの詩集『がらつばのうた』（昭和四十九年刊）は鹿兒島の伝説にもとづくもので、「郷里では河童のことをがらつばという」と説明がありますが、お生まれは鹿兒島ですか。

児玉 父の郷里なんです。父が官庁勤めだったので転勤であちこちへ移りましてね、私は枚方で生まれました。その父からよく聞いておりましたのと、児玉家の先祖の墓があらにあるものですから、墓参に行きましたりで、鹿兒島は私自身の生地のような感じがしてまいりましたねえ。あの詩集は、父に代わって、私の子供たちにも伝えるために書いたようなものです。

最初に鹿兒島へ行ったのは中学時代で、汽車で二十何時間かかった。下関を通るでしょう、私には思い出の多い港街でしてねえ。家内の両親が韓国の仁川に住んでいて商業をやっていましたから、結婚してからのことですけれども里帰りする家内を下関まで見送りに行ったりで。門司もよかったです。エキゾチックな果物のおいがして……。家内が亡く

なる少し前、いっしょに鹿兒島へ墓参りに行きました。それが最後です。

——じゃあ、同志社へ入学されるまで、枚方で過ごされたわけですか。

児玉 いやいや、小学校を六、七へん替わっている。中学校は堺でした。酒のみの父は退職してから、堺の酒がいちばん気に入っていたので、のちに堺市長になった人が酒蔵に近い家を探してくれましたね。家にはいつでも四斗樽が積んでありました。

——羨ましい。(笑)

児玉 堺には小学校の下級生のとき一度住んで、上級生になってまた住むようになって、父の酒が縁で前後二十年住むことになったのです。家内の実家は縁続きなので、家内は私が中学生のころから何度か堺へ来ています。

——奥さんの思い出がどこにもまつわっているんですね。同志社へはお父さんにすすめられて。

児玉 父は国立大学へ行かして法律をやらせたかったんですが、私は国語、漢文、英語それからスポーツが得意でしたが、数学や理科が苦手でした。国立へ行くには旧制高校

児玉実用名譽教授に聞く

同志社大学の

戦中・戦後

聞きて

河野 仁 昭

へ入らねばならぬので、苦手な試験科目があるということもあり、京都へ受験にきておいて、無断で同志社大学を受験したのです。だから、家の者は待っていても高校からはなんの連絡もない、そこへ同志社から合格通知がきた。

——叱られたでしょう。

児玉 薩摩の古武士タイプで、人に涙などみせたことのない父が、そのときは泣きました。

——わかる気がします。

児玉 私は系統だてて考えろとか、論理的に思索するといった方には向いていないのです。法律は嫌いだから英文学をやらせてほしいと言いましたら、父の目に涙が……。私の一生におけるただ一度の不孝でした。父の意志に背いてまで入学したんだからと、勉強はかなりしました、大学院にも進んで、生涯で一番よく勉強したのはあのころでした。

大学予科のころ

——有終館の失火事件（昭和三年十一月二十三日）は、先生が入学なさってからですね。

児玉 本科でしたか。御大典の最中のことで学生の代表が丸坊主になって、建礼門まで行って最敬礼をして謝ったのです。その前の年（昭和二年三月六日）女子部の静和館が焼けたり、その前後にまた丹後の大地震があつたり……。有終館の火事の際の消防車のエンジンの音が、今でも聞こえるような気がします。

女子部の火事の時は、近くに下宿していた男子学生が、素っ飛んで行って、女子寮から柳行李などの持ち出しに加勢したり、有終館の時は、男子学生が毎晩夜警に当っていると、女子部から炊き出しのおにぎりが運ばれてきたり、同志社にはそんな家庭的麗しさが流れているのには感動しました。そう言えば、私たち男子の大学卒業式には、女子部から並んできた可愛い女学生が、一人一人の胸にヴァイオレットの小さな花束をはなむけにさしてくれたのは今も忘れられません。同志社はいいところだなアと思いました。

——詩を書き始めるのは、大学へ入ってからですか。

児玉 中学時代です。家へよく遊びに来られた先生がそれを見て、謄写版で詩集を作っ

てくれましたね、『角笛』という表題で。これが私の処女詩集です。北原白秋とか西条八十の詩が好きでしたから、影響されていたと思います。

——同志社にも学生の同人雑誌がいろいろあつたようですが。

児玉 予科の二年生のとき『自由詩人』というのを創刊しましたね、活版刷で。私の下宿が編集所だった。予科のころは私も文学青年でして、ほとんど毎晩のように着物袴に下駄をガラガラ鳴らせながら京極の方へ行きまして、四条に「コマドリ」という喫茶店があつて、可愛い子がいますねえ、その子の顔を見によく通うたもんです。それで私は「コマドリ」というあだ名をつけられた。（笑）

——大学では、『自由詩人』から作品を書きはじめてたんですか。

児玉 予科へ入ったころ、同志社人主体の総合雑誌で『街』というのが出ていて、私もそれに入れてもらったんですが、小説に同人費をくわれるものだからうまくいなくて、詩をやる者が独立して『自由詩人』を出したのです。

そのころ、予科は雑誌部と応援団の二頭だ



児玉実用名誉教授

てで、私は予科二年生のとき雑誌部の副委員長、三年生のとき委員長をやりました。雑誌部の仕事の一つに、一年一回『オール同志社』という雑誌の編集・発行があって、女専、高等商業、大学本科などすべての学生から原稿を募るのです。そのとき女専の方を担当して下さったのが田辺（旧姓・星野）繁子さんで……。

——ほッ……。

児玉 いろんな方と親しくなりました。三年生のときに出した『オール同志社』は、『芸芸色がつよすぎる、我々の社会主義的主張を無視した雑誌に学生会費を使うのはけしからんやないか』と、私はえらい叱られました。なア。叱った学生は姫野誠二さん（同志社大学元教授・故人）ですがな（笑）。わからん

ものですか。

『同志社文学』の1と2

——『同志社文学』の創刊（昭和二年十二月）は、先生の予科時代ですか。

児玉 英文学科一年の時です。先年亡くなられた中村貢さん（元女子大学教授）が、今のハワイ寮の所に任んでられたS・C・パーレット先生の宅におられた関係で、先生のご好意で一週に一回、木曜日だったかにお宅の一室を使わせて下さったのです。一部学生のために。そこへ酒詰仲男（元教授・故人）、桜井忠一（元教授・故人）、岡橋祐（故人）といった先輩が集まった。私も呼ばれそのパーティレット先生のお宅での会合で、「明治期の『同志社文学』のような雑誌を出そやないか、東に『三田文学』、『早稲田文学』などがある。西に『同志社文学』があつていい。英文学科が中心になって」という話が出た。それで私は、本科一年生でしたが二、三年生の教室へも行って訴え、各学年から委員を出してもらってその雑誌を創刊したんです。

——内容は芸芸雑誌ですが、発行所が同志社大学英文学科文学会となっているから、英

文学科の機関誌で、学校が出したものとばかり思っていました。

児玉 英文学科全体にアピールしてそういう会をつくって、学生の費用で出したんです。創刊号の「編集後記」は私が書いた、というより書かされた。無署名で。

——はい。

児玉 桜井忠一君などよくバック・アップしてくれましたけど、「児玉にまかしとけ」（笑）とみな言いましてね、私に押しつけられて。無署名で思い出しますけど、アーモスト大学のジョンソン・チャベルの新島先生肖像下の言葉も私のものです。英訳してくれたのはドナルド・キンさんで共に無署名です。

——耳にしたことがあります。

児玉 『同志社文学』では、先生方には顧問になっていただきました。当時の文学部長であった和田琳熊先生とか、美学の園頼三、ダント学者の黒田正利といった先生方ですね。園先生や黒田先生のお宅へは何度行っただか知れませんが。お宅へ行くとよくして下さいませ。

——英文学科の学生には、文学的な雰囲気があつたんですか、当時。

児玉 それがそうじゃなかった。非常な不況の時代で、多数は文学志望じゃなくて教員志望でした。私などは、「好きなこととして野垂れ死しても」という気持ちでしたから文学オンリーでした。

——今のアーモスト館あたりにあった東寮が、教室になっていたそうですね。

児玉 そうそう、教室が足りなくて、寮を閉鎖して教室に使っていました。

同志社への目覚め

——同志社の英文学は学界ではどうだったんですか、伝統はございますよね。

児玉 私の学生時代に日本英文学会が創設されて、その第一回目が東大、二回目が京大、そして三回目は東大、その後同志社でも開かれました。二回目のとき上野(直蔵)さんが、三回目は私が研究発表したんです。当時上野さんは英語師範部の教員でした。

——上野先生は留学されるでしょう。

児玉 そう、シカゴ大学へ。そのあとを大学院の指導教授だった舟橋先生にいわれて私が埋めることになった。上野さんは帰ってきて英文学科へ行き、私はしばらくして予科へ

移りました。

——話はちがいますが、創立六十周年に同志社は『我等の同志社』という立派な記念誌を出版しますが、児玉先生が編集なさったとか。奥村龍三さん(故人)に聞きましたか。

児玉 そう言ってしまうと叱られるかも知れない、田中良一さん(故人)とか園頼三先生(故人)に。でも、当局側の責任者であった奥村さんから、「安う、しかも玄人がつくったような雑誌を作ってくれませんか」と頼まれたんです。仕方がないから教えたこともないカメラ部の学生とか、後に新聞記者になったような筆の立つ学生など十名ばかりを集めて編集委員会をつくりましてね。私は編集方針をねり、彼らと十分話あいをして、分担してやってもらったんです。あの編集は苦勞しました。当初の予算は一万五千円ぐらいだったと思いますが、何千部刷ったかは忘れませんでしたけれども、その倍額はかかったようです。

——実に内容豊富で、読みごたえがありませぬえ。

児玉 私の若い日の構想が出ていると思っ

——期限内できましたか。

児玉 六十周年のリユニオンに配ることになっていました、間に合いました。編集委員の学生たちは奉仕でした。アルバイトというのは戦後のもので、当時の学生は奉仕しか知らなかった。ご苦労さんだからと奥村さんが自宅へ呼んでよく焼ききをご馳走されたことはありましたけれども。そのとき手伝ってくれた中の金子君、後に富士フィルムの重役になって、いまフェンシングOBの最長老です。

——校正まで学生が？

児玉 そうです、大阪まで出張校正に行ったり、深夜までねえ。しまいには皆くたびれてしまつて。私も時間や努力をずいぶん犠牲にしましたが、しかし、あの仕事が私を同志社人にしてくれたのです。

——と申しますと？

児玉 あのころはまだ、新島先生の直弟子の大先輩が何人も生きておられたのです。徳富蘇峰、小崎弘道、海老名弾正、浮田和民、深井英五、湯浅半月……。そういった先生方に編集の用で会いに行つたのです、インタビューだとか原稿依頼とかで。すると、どの方

も「新島先生を尊敬している」と、心から言われるんですね。私はよく知らずに、そんなに偉い人とはそれまで思っていないかった(笑)。だからはじめて新島先生の偉さと、同志社を出た人たちの人格のすばらしさを知ったのです。以前なにかに書いたことがありますが(『同志社大学通信』一六号、一九七五年一月) たとえば浮田和民先生を訪ねて行きました、「同志社六十周年記念誌編集部」の名刺をつくってもらっていたのでそれを出したんですよ。そしたら、「同志社の人なら名刺はいらん、上がりなさい、上がりなさい」といった調子で同志的信頼をしてね。それから、「これから小崎先生のところへ行きませ」と言ったら、茅ヶ崎の分かれ道までわざわざ送って下さって、ステッキを持って立られて、「そこを左へ曲れ」とか遠くから教えて下さるんです。角を曲るとき手を振ってお別れしたんですが、同志社にはこんな親身の大先輩があるんだとしみじみ感じました。この浮田先生が新島伝を書くとしておられたんですが果たさず、それを魚木忠一先生(元教授・故人)がうけ継いで『新島裏一人と思想』(同志社大学出版部、昭和二十五年)と

して完成なさったんです。徳富さん、深井さん、どなたに会っても新島先生を尊敬しておられるし、同志社の者ならと信頼して下さるのです。徳富さんや半月さんには色紙までいただきました。「先生の遺業を承け、以て開拓するは後進の道也」と徳富さんは書いて下さって、私は学長代理のとき卒業式でその言葉を饒にしました。

——同志社は素晴らしい学校だと、卒業生に会われて認識されたわけですか。

児玉 そうです、だから自分も本当の同志社人になるうという気持ちになった。そしてまた、信仰心がないがゆえの人間の醜さなどがしきりに思われて、希望、信頼、愛、そういったキリスト教のモラルを持ちたいと思うようになって、仏教からの改宗を考えるようになったのです。洗礼を受けるなら夫婦いっしょと思ひ奥村さんご夫妻の導きで、平安教会の山口牧師から洗礼を受けました。山口先生は予科のとき倫理を教えて下さった方です。クリスチャンになってもう五十年ちかくなります。

戦時下の大学

——戦時中も予科で?

児玉 恩師の山田貞夫先生(故人)が予科長で、私は教務主任でした。山田さんはほんどのことをまかせられたので、私が予科をかなりきりもりしていました、七年間もコンピを組みましてね。新聞には報道されませんでした、戦時中に島根県に大洪水があった、同志社からも列車を借りきって、田圃の泥を除く奉仕に行ったことがありました。当時の牧野虎次総長と、山田さんの命令で私が学生たちと一緒に行ったのです。私は学生たちを五カ村に分宿させたり、大水か火事のともしか鳴らさない寺の太鼓を学生がたたいて、村長さんの所へお詫びに行ったり(笑)。

一段落したら京都へ帰ってきて、勤労作業に行けない病弱な学生のための授業時間割や残留の先生方の分担を決めておいて、また現地へでかける。

そんなことをしていたとき、盲腸と腹膜炎を併発して死ぬか生きるかという重態になった。山田さんが「すまなんだ、仕事させずぎた」といって、大変心配されまして物資窮乏の戦時中でしたから、酒屋の学生から酒などを持ってきてさせて、それを米に換えて重湯の



山田貞夫先生

用をたして下さったり、府立医大の外科部長を呼んで入院させて下さったり……。あの時は自動車などないですから、外科部長さんは自転車で宅診して下さってねえ。なにもかもひどい時でした。

それから、忘れるにも忘れられないのが学徒出陣……。

——昭和十八年十一月十五日に、同志社でも壮行式をやっていますね。

児玉 みんな学生服にゲートル巻いて、隊伍を組んで校門出て行くでしょう、女学校の生徒も日の丸の旗を振って見送りにきて……。こういう話をしていると、いまでも泣けてくる……。みんな出て行ってしまつと、校内はガラーンとなつてしまつてねえ、授業するにもできん。キャンパスで出陣学徒を思い、

空を仰いでひとり涙ぐんでいました。

私は専門学校の教員のときも、予科へ移つてからも、学生たちといっしょにピクニックしたり、何か食べに行ったりしました、私はまだ若かったから。学生は家へもよく遊びに来ました。戦時中になつてからは夜おそくなると警官に訊問されるんですよ。同志社人はスパイだと疑われていた。「どこへ行っていたか」といわれて「児玉先生の家だ」と学生はこたえます。だから交番はうちの様子をよく知つてるのですわ(笑)。学徒出陣が決まつてお別れの会をしましてね、米のありそうな所まででかけて行って。帰りに軍歌でない歌を大声でうたつていて学生といっしょに私も警官に叱られたりしました。「出陣するので最後の杯をくみ交わしてきた」というと、「どうも苦勞さんです」というようなことがあったり。学生たちがみんな書き置きて、「先生これだけ残して行きます」といつて出陣しました。学生たちとほんとに親しくしていたから、生木を引き裂かれるような思いでした……。出陣する学生を新島先生の墓前へ

連れて行って、自分の詩を朗読したこともありました。軍国主義的なものじゃないんです、

「いづれ君たちは砲煙彈雨の中へ入って行くだろう、……ああ、秋の木の葉が散つてゆく」といった調子のね、叙情的な詩なんです。

戦時中は学生が煙草をすつたりマフラーをしていると軍事教官に叱られたんです。マフラーで叱られた一人が小説家になつた黒岩重吾君で(笑)。「賞様、退学じゃ!」と、きつう叱られる。それを「まア、まア」と救うのが教務主任の私の役目で。(笑)

教養学部誕生

——先生が予科長になられたのは、戦後になつてですか。

児玉 そうです。日本の学校制度が変わりまして、同志社でも新制中学ができ(昭和二十二年四月)、その翌年には高等学校ができまして、その新制高校が開設されますとき、予科長であつた山田貞夫先生が校長で転出されて、その後を私がやることになったのです。山田さんはピューリタンで根っからの教育者でしたからね。私は多少英文学の研究もつづけておりましたけれど。

——二十三年には教養学部が生まれますが、予科もまだ残っていたんでしょ。

児玉 オーヴナー・ラップしていて、それで厄介でした。入学式ひとつにしても、教養学部は栄光館でやるし、予科はチャペルでやる。教養学部長兼予科長の私は、式辞のためまるで寄席の囃子みたいにあっちへ行ったり、こっちへ行ったり(笑)、短期間だったですけどねえ。新制では教育理念もちがう、担当者が見られないような科目も設けねばならない、だからオーティス・ケリーさんなどと京都大学あたりへ教員探しによく行きました。生物の山田忠男さんなどそのときに来ていただくことになったのです。

——教養学部の構想はどなたが？

児玉 湯浅八郎先生が総長兼学長で(昭和二十二年五月就任)、私を呼ばれて、「新しい教養学部は予科だけを中心にして考えてはいかん。準備のために委員会をつくれ」と言われた。それで同志社経済専門学校(元・高商)の岡本春三さんと、アメリカからきてまだ間がなかったオーティス・ケリーさんと、私の三人が準備委員になりましたね。岡本さんはいぶん先輩でしたが、アメリカの大学で学んできた方でした。ところが、三人のゼネレーションが全くちがいますから、話がちっと

もかみあわんのです(笑)。ケリーさんが心配して毎晩のように家へやってきました。彼も言いだしたらなかなかひっこまんのですわ。(笑)

あまりにアメリカ風にしてしまうと先生方から反発が起こりますから、私もずいぶんアメリカナイズしていると言われましたけれども、できるだけジャパナイズした学制にする、それが私の役目でした。

そうして予科を主軸にした教養学部をつくらせて、それに経済専門学校と工業専門学校、外事専門学校などを吸収していく。そういう仕方方針で原案をつくりまして、大学評議会の承認を経て発足したわけです。そのとき、大予科や旧専門学校の先生方を全員新制大学の先生になっていただいた。あれは私の努力だと言う方もありますけれども、実際制度のきりかえのときには、先生方の中には身分上のことで心配された方もあったんですから。首になるんじゃないかとね。

リベラル・アーツと新制大学

——教養学部というのは独立の一学部なんですか。

児玉 文学部や、法学部、経済学部などと併列したものでした。教授会もあって。

——その学部は、文、法、経済のように専門教育を施す学部ではありませんね。

児玉 そうです。「大学設置基準」にいう教養教育をやる学部でした。幅の広い教養人を育てようというところで、そういうリベラル・アーツの方針が新制大学では採用された。ところが、問題は科目の選択制なんです。「大



新島先生の墓前にて(123頁参照)

学令」による予科では「教授要綱」に従って
 いましたから、どの科目も必修でした。だか
 ら進級するためには苦手な科目でもとらざる
 をえない。選択制にはむろん長所もあるんだ
 大正十五年・アーモスト大学代表教師送別の時(一二三頁参照)



けれども、学生は年々イージー・ゴーイング
 になって、単位のとりにくい科目とか、朝の
 早い時間に配当されている科目などはとらな
 いとか、苦手でも自己形成に真に役立つた選
 択をするというのじゃないわけで、
 旧制大学に比べてかえって視野の狭
 い教育をうけている面があるんです
 なア。これじゃ新制大学が意図した
 高度の人間教育にならないのじゃない
 か。おまけに受験戦争の激化でゆが
 んで行くでしょう。

——同感です。現在はいっそうそ
 うですね。

児玉 教養教育というものは、日
 本では育ちませんね。

——教養ということに関する理解
 とか評価は、大学内でも十分とは言
 えないかも知れませんか。

児玉 湯浅先生も私も、教養学部
 を将来は四年制にしたいとひそかに
 考えていたんですが、他の学部の先
 生方の理解はとでも得られそうにな
 かった。

あれこれやっていますうちに、学

生の数が非常にふえて、マスプロになってき
 た。これじゃよい教育は徹底できないと、私
 は内心思わざるをえなかったですよ。教授会
 をやるにも七十余人の先生ですから、意見の
 とりまとめがまた大変。そこへもってきて各
 学部の先生方からはもっと専門的にと文句が
 でてくる。私は予科の教務主任を長年やって
 いて学内政治には慣れていましたが、全く大
 変なことでした。

教養学部の廃止

——昭和二十六年三月末に教養学部は廃止
 になりますね。

児玉 二年目あたりまではよかったが、三
 年目になって学生が急増加したりでどうも
 むずかしくなってきました。教養学部とい
 うのは、他大学の教養部に比べて先進的なも
 のでした、学部として独立していたんだから。
 国立大学の先生も含めてあちこちの大学から
 視察にこられるので、その応待だけでもけっ
 こう忙しかつたのです。

——入学試験も教養学部でやったわけだし
 よう。

児玉 学生はまず教養学部へ入りますので

ね。どの学部へ進むかは入学してから二年間のあいだに決めるのです、適性などを各自が考えて。

——学部への偏りなどは起こりませんでしたか。

児玉 どうしても偏りがちなんです。予科のように少人数のときにはそれでもよかったです。が、何千人というふうになりますね、第一志望は平均点何点以上でなければ駄目、それ以下は第二志望の学部へ行けとか、学生と学部の間に入って苦労が多かった。母校のためという気持と、私は一つのことをやりだすと熱中して自分を忘れるたちなので、家庭も顧みなくなる。だから家内には感謝しているんです、小供が五人もあって、教育でピーピーしていたときでもありましたからねえ。それをよくやってくれたと思います。

——教養学部を育てようという雰囲気は、大学内になかったみたいですね。

児玉 そういつてはなんです、教養教育に対する理解はあまりなかった。だから学生数の増加や学部への進学希望の偏りなどの問題もあったり、入学願書にも志望学部を書かせるようになって、教養学部の存在の意義

が問われるようになってきたのです、はじめから希望の学部へ入学させて教育をした方がいいじゃないかと。

——旧制大学の理念が拭えていなかった面が多分あって、それが教養学部とか一般教育の発展を妨げたように思いますね。それとアメリカの大学教育に比べて大学院教育が未成熟で……。

児玉 そうなんです。だから教養学部長をしていたころ、私は息抜きによく各学部の部長さんを訪ねてまわりましたね、大学のあり方やいろんな話をさせていただくのが楽しかったです。

——お仕事に関係なくて？

児玉 「天下の情勢はどうですか」などと冗談言いましたね。経済の黒松殿さん、小松幸雄さん。法学部の島本英夫さん。工学部の堀場信吉さん。そういった方たちが部長で。

堀場先生の専門は何か知りませんが、音楽がお好きでしたし、「私はいま、人間の生命というものは一体どういうものか、それを研究してますねん」というようなことを言われてね。科学者がそういうことを考えられるのかと思ったり、経済学部ではマーケティングな

どという当時耳新しい分野の話を聞きました。で、それぞれとても興味ぶかいですよ。

島本さんからは悩みを打ち明けられたりしてね。あのような先生方の人間性にふれ、さまざまな分野のお話をきく、そういうことが大学教育の場で実現できたら素晴らしいんだけどな。総合大学は各専門の討議場なんだから。

——教養学部の廃止は残念な気がします。

同志社より後で制度化された東大やICUのばあいはうまくいっていますのにねえ。明徳館の前に教養学部廃止記念の小さい碑がありますね、ヒマラヤ杉はその記念樹ですか。

児玉 よくは憶えています。が、そういうことをやりましたな。

教務部長時代

——教務部長に就任されたのはいつですか。

児玉 大下角一先生が学長をしておられたときで、入試にエラーが起こった後でした。

——『京都新聞』にすっぱ抜かれた？

児玉 『毎日新聞』その他にも大きくとりあげられて。それで大下さんは私に目をつけ

たのです、予科の時代から長年にわたって大学の入試をやってきましたからね。

——それで入試の改革を……。

児玉 むかしは入試の問題を学内で印刷していたんです。受験生もそんなに多くなかったから、学内でやれたんです。私が予科教務主任になって、山科の刑務所へ頼みに行きましてね、校正も印刷も全部刑務所でやるようにした。それが改革の一步で、一時期私は、まるで入試の請負師みたいなものでした。

(笑)

——新町校舎で授業をするようになった(昭和三十四年四月)のは、先生が教務部長のころですか。

児玉 尋真館の建築構想ができた年に、私は部長を辞めたのです(昭和三十七年二月竣工)。構想をまとめるとき、私は教室の壁に色をつけることを提案しましたね。明治大学の教室がともカラフルで、教室の雰囲気と色彩は教育に大いに関係があるときかされていきましたから。わざわざ工芸繊維大学の色彩学の教授に来てもらって、壁の色までほしい決めた。そして外国へ出掛けまして、帰ってみたらそれがやられていない。

「なんでやらなかった」とたずねると、「予算がありませんでした」と。

——でも、臨光館の二階に設けられていた教授控室の天井は、中間色で塗られていたが。

児玉 そうですか、気がつかなかった。まあ、思い出してみたら、同志社ではいろんなことをやりました。大方の人がご存知ないようなことまでねえ。

——『同志社大学裏面史』を書いておいて下さい。(笑)

児玉 私は年代などを憶えるのが苦手だから、そういうことは不向きで。上野さんはその点なんでもよく憶えていましたなあ。

「和」ということ

——教務部長を辞任されて間もなく文学部長に就任されますね。

児玉 皆の投票でね。引き受けるかどうかというとき、私は「数字が苦手だから、予算や何やいわれてもわからん、いつどこであったことや言われても記憶ようせん。それを承知して下さるなら選挙の結果どおりお引き受けします」と、教授会で断わりまして。亡く

なった秋山国三さんなんか、「児玉君は数字の二けたや三けた間違つても平気やから」とよく冷やかした。(笑)

——それはキシシイ。(笑)

児玉 ほんとのことやから、言われても仕様がな(笑)。私はただ、人の和ということをお大切にしようと考えたんです。人間は和が大事ですから。

部長になったころ、文学部の三分割、つまり英文学科、文化学科、社会学科を分離して、それぞれ独立の学部にしてはどうかという問題が議論されていた。予算はどうするか、研究誌はどうやるかと、皆それぞれが所属学科の利益代表みたいになって、そりゃ険しい空気でした。その心労で、前々部長さんや前部長さんなどは痩せてしまわれたんです。

私は予算とか人数とか数字の問題はようわからんし、分割すること自体あまり意味がないと思っていました。それよりも文学部内の険悪な空気をなんとかする方が先決問題だと思つたのですから、就任早々に「三つに分ける問題、もう止めまひよや。そして仲良うやっていきまひよや」言つたんです。そして

